

## 第7回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和3年8月30日（月）18:00～

■開催方法：Zoomによるオンライン開催

■出席者 委員：

伊藤 千織いとう ちおり／伊藤千織デザイン事務所 代表  
漆 崇博うるし たかひろ／一般社団法人A I Sプランニング 代表理事  
大友 恵理おおとも えり／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員  
カジタ シノブかじたしのぶ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター  
木野 哲也きの てつや／ウタウカンパニー株式会社 代表  
古家 昌伸こいえ まさのぶ／北海道新聞社編集局文化部長  
酒井 秀治さかい しゅうじ／株式会社SS計画 代表取締役  
佐久間 泉真さくま もとまさ／市民委員  
関 鎮京みん じんきょう／北海道教育大学岩見沢校 准教授  
森嶋 拓もりしま ひろし／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長  
山本 雄基やまもと ゆうき／画家

欠席：尾崎 要おざき かなめ／アクトコール株式会社 代表取締役  
小島 達子こじま たつこ／株式会社tatt 代表取締役  
八條 美奈子はちじょう みなこ／札幌フルーツ協会 副会長

事務局：

札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之

札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 高橋 由美子

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 下山 竜平

■議事概要：

### 1 短期的な視点の施策について

#### (1) 事務局説明

第6回札幌文化芸術未来会議における議論を踏まえて改めて検討した施策案について、前回会議の振り返りを行いつつ、資料1～3及び参考資料をもとに事務局から説明した。

#### (2) 各委員からの意見

○例えば、中間支援組織として事業に参加しようとしたとき、こういうアーティスト

トたちに支援をしたいからこのテーマがいいと考えることがあると思う。一般的には、補助金や助成金を受けようとするとき、明確な事業プランのようなもので勝負する。いろいろな判断基準によって選定されると思うが、結局のところは事業内容や企画の精度に左右される。今回、創作活動をしようとしている人たちや継続したいと思っている人たちにとって直接的な支援となる仕組みにしたいと思ったとき、申請団体が考える事業プランの評価と支援対象となるアーティストやグループの資質の関係をどう考えていくのか？

⇒（事務局）プロポーザルのような形で中間支援組織を選ぶことを想定している。

例えば、札幌市として、テーマや活動されている方々に対して支援を行うときの基準の想定をお示しできると思う。それに対して提案をいただくとき、こういう観点で募集をしたら、こういう困っている人たちに支援がより届くのではないかというご提案をいただくこともあり得る。どういう基準で、どう選ぶのかなども含めて委員の皆様とお話しできればと思う。

○支援団体が企画したものの面白さと個々のアーティストの面白さ、資質の関係はちぐはぐになる可能性も十分にある。そのため、どちらに重きを置くかは中身を考えていく上では重要で、そのイメージがあればお聞きしたいと思い、質問した。

○支援団体が考えた支援メニューを審査し、その支援メニューに対してお金を出すという考え方。そのため、支援メニューのプランが非常に重要で、未来会議としては面白いプランが出てくるようなテーマ設定や前提となる考え方を示すことが重要だと思う。

○根本的なことだが、中間支援組織は札幌市の事業者と区切ったほうがいいのか？ 中間支援組織がどうあるべきかはすごく大事だと思うが、札幌市で芸術文化に関わる団体、もしくは、会社は大分限られると思う。アーティストの窓口としての事務局と言われるところに中間支援組織がなり得るといえるとき、アーティストから来るであろう細かで大量の問合せなどを、業務として円滑にこなせるころは大分限られるのではないか。大きな代理店などは慣れているからがんと参入できるだろうが、フレームとしては、中間支援組織も育てたいし、アーティストも育てたいというもの。例えば、小さな会社ではあるが、すごく画期的で面白いことを考えている。しかし、問合せ対応等のスキルは持ち合わせていないというところもあると思う。そこをどうサポートするのか？ その辺も考えたとき、どういうフレームで、どういうスキームがいいのかが気になった。

⇒（事務局）札幌市内の団体で担えるところがどれぐらいあるだろうかということは、正直、我々も思っているところ。ただ、一つの団体のみで手を挙げるという方法がある一方、協力して手を挙げるという方法もあるだろうと思う。また、今の

御質問を受けて、個人の思いつきでお話をするが、例えば、中間支援組織を幾つか選ぼうとしたとき、少なくとも半分は市内中心の人たちにするというのもできると思う。外のノウハウがある人たちの力を借りることもスタートの段階では必要かもしれないので、外から来る方もありとしても、半分は地場の方々にするなどのルールを決めることもあり得ると思うが、その辺りについても今後の議論の対象としていきたい。

- それぞれ得意不得意があると思う。大きな会社だと、いろいろな部署があり、業務をこなせるのかもしれないが、芸術文化の発想力というのはまた違うところにあるではないか。アーティストや申請者の面白み、可能性を引っ張り続けて実現してほしいし、落とす前提ではなく、いいものを引っ張り上げて実現させたい。例えば、個人がチームを組んだ団体を審査するとき、個々人のキャリアは示せるが、チームとしての実績はないので示せないといったことも考えられる。そこをどう見るかということも大事だと思う。
- 道外の人も参加できたらいいと思うし、その仕組みづくりは大事だと思う。札幌市が中間支援組織を支援するようになったとき、全国には、お金はないけれども、いいことをしている中間支援組織が本当にたくさんある。そういう人たちが札幌に来ればより活性化するのではないかと思う。また、中間支援組織団体の数はまだまだ少ないと思うが、先ほど出てきた案のような方法を使えば、例えば、美術と演劇など、条件や求められているものなどが違っていても、アーティスト同士で1年だけでも手を組んでみるということもできると思う。
- 札幌市から出るお金だし、ちゃんとしなければというのはそうだが、せっかくだから、画期的なものでやってみようということも思っている。業務をこなせそうな団体も想像できるが、それはそれとして、次世代へとつながっていく、次世代も育つ、キャリアアップをゼロイチでやっていくという仕組みも持たせられないかと思う。そこも含めて何か画期的なアイデアが考えられないか。

## 2 新しい支援の仕組みを導入するメリット・デメリット等について

### (1) 委員長から議題提示

関委員長から、新しい支援の仕組みを導入するに当たって考えられるメリットやデメリット、懸念点、課題など、あらゆる視点から自由に意見を述べてほしい旨の議題提示があった。

### (2) 各委員からの意見

- メリットは、幅広い案件に対応でき、幅広く手が届くところ。行政やアーツカウンシルなどが主導のものは、支援先が偏る傾向があり、事実かどうかは分からな

いが、トップの人が演劇だったら割と演劇寄りになるという話も聞く。小さな組織がたくさん増えていくことが理想だと思う一方、現実的にできるかどうかが一番の問題かと思う。また、育てるという観点では、いくつかの団体が中間支援組織として一つの目標に向かってそれぞれ何かをやるというときは、報告会のような中間支援組織同士のつながりの場、中間支援組織同士で切磋琢磨する場が必要かと思う。また、事業評価のようなものは不可欠。報告会と事業評価をセットにするということ。あと、どこが手を挙げてくれるのかということについて、最初は申請者同士を交ぜ合わせるということがあってもいいかもしれない。

- デメリットについて、テーマにもよると思うが、例えば、期間を決めて実施する場合、次の期間では別の団体が事業を行うということもあると思う。そうなったとき、補助金を受けられなくなったから終了するという状況が過去にもよくあった気がしている。中間支援組織を育てるのであれば、お金が切れた場合でも独立でやっていけるような支援を行政側がやってはどうかと思う。例えば、それはスポンサー探しを一緒にやるでもいいし、アーティストバンクがそうだと思う。それをやって終わりました、ではあまり意味がない。しかし、1か所がずっとやっていたら、その事業は札幌市がやっているようなものになってしまう。そうではなく、幅広にするときにどうしていくのか。育てるというのは、ある意味、そういったお金の頼らなくてもやっていけるというのが肝の部分だと思う。
- 大きいお金を動かすような事業が要求されるのであれば個人は応募できないということもすごくあり得ると思う。個人、あるいは、小さい組織をいかに育てられるかというところはすごく気になるところ。このスキームはすごく魅力的だと思っている。
- メリットは、今のところ、ジャンルごとに専門性が担保される可能性があるところ。ただ、デメリットや心配事、必ず問題になるだろうというものはいくつかある。あくまでもファインアートの領域の話だが、ファインアートは個人で完結できる表現をしている方が多い。そのため、チームを組める人もいれば、それに全く相性が合わない人もいる。また、団体数が少ないとそれだけ団体の信頼性が揺らいでしまうので、どうやって団体の信頼性を確保するのか。育成をする前提にしても、専門的な仕事をしてきた人が半分入っている、あるいは、アーティストの当事者が組織の中に必ず1人はいるなど、現場の声を継続的に引き上げられる状況を持てる団体をどうつくるのが問題になってくると思う。運営費がもらえるからという理由で、付け焼刃で団体をつくって申込む人たちも出てくる可能性があるため、それを防止する仕組みも必要だと思う。また、ピンハネの防止や、中間支援組織の数が増えて、全体の予算のうち運営費に回っていくお金が

増え過ぎたときに、一番下の現場に下りてくるお金はどうなるのかという疑問もあり、数の調整も必要になってくると思う。また、助成金を取る時の問題点として、必ず書かなければならない項目が多かったり、記載の必要性が不明な項目がたくさんあったりすることがあり、その辺も整理したほうがいいと思う。アーティストの立場からいえば、できるだけ自由度の高い、制限の少ない制作の環境が整えられること、そして、現場の声をちゃんと拾ってくれる仕組みがあればオーケーだと思うので、最終的にそこをどうキープするかを考えていただければと思う。

○そもそも論だが、結局、誰を支援しなければいけないのか。創作活動を止めないということを支援するとしたら、やはり、アーティストや表現者に対しての支援なのだと思う。支援団体を育てることは、理想的だし、重要だと思うが、来年の7月以降に施行されるものが緊急対応と受け取られるか、果たして本当に緊急対応なのかが分からないが、最終的に創作活動を止めてほしくないアーティストたちに支援をしなければいけないというとき、中間支援組織が育つまで待たなければいけなかったり、まだ運営がままならない支援団体に支援をして果たして本当にアーティストにまともな支援が行き届くのかは、緊急対応という観点からは考えなければいけないと思う。そういう意味では、もともと表現者とのネットワークがきちんとあって、団体として公的資金の再分配みたいなことを普段からやっているところで、きちんと信頼関係を持っているところがプランする支援メニューが緊急対応としては求められるのではないかな。3年や5年をかけて支援団体を増やそうという長期的なプランであればいいと思うが、このスキームが短期的なものに分類されるのだとしたら、既にきちんと実行できるところが取ってもしかるべきだと思うし、そういうところが取ったほうがアーティストにお金が行き届く可能性があると思う。ただ、常連の団体の中には、代理店みたいなところも含め、本当の意味で支援をしようとしているのかどうか怪しいところや、搾取やピンハネをするようなところもあると思うので、その見極めはしなければいけないと思う。確実に支援しなければいけないところに支援されるメニューとそういう関係性を持っている団体にきちんとフォーカスしてやっていくのか、今から新たに支援団体を増やすという方向で自由度の高いスキームにしていくのか、ここは議論が必要という気がする。

○個人で活動されている方々や実績を示すのがなかなか難しいところをどう拾い上げるか、組み込んでいくかは少し気になったところ。特に、育てるということが一つのキーワードであるならば、若い世代から見たときに、中間支援組織で実績のある団体は離れた世代の方々が多く、若い世代がそういった団体と一緒になっ

て取り組んでいけるのかが気になっている。

- デザイン業界というのはあまり中間支援という概念がなく、どちらかというところと経済に近いところがある。足りなかったら営業努力をしたり、スポンサーを見つけてきたり、自分たちでお金をつくったり、そういう自助努力で成り立っているせいか、中間支援と言われても他人事とってしまうところがある。人口が少ないジャンルにいる方々が中間支援から落ちないように、情報なり、そこに辿り着くまでの流れのようなもの、あるいは、どうやって告知していくのかが大事になってくると思う。
- アーティストを支援しよう、アーティストのキャリアアップや創作を支援しようという原点があり、そこは絶対守りたい。ただ、議論の中で中間支援は大事であり、中間支援組織を生み出す、顕在化させるということも出てきて、頭が二つ必要になっているのかなと感じる。それに、アーティスト支援のメニューをつくることも、中間支援組織を生み出し、育てようということも初めてで、パンチ力があり、すごく重たいと感じていた。中間支援組織がどうあるべきか、どういう条件で、どういうフレームだったらいいのだろうかということは時間がかかるような気もした。育てる大切さもあるが、育て続ける時間を担保したり、誰が見守り続けるのか、また、どこまで行ったら育ったと言えるのかということもある。中間支援組織のゴールや目標設定値といったものをある程度は見据えなければいけないということもあり、すごく時間がかかりそうだと思った。アーティスト支援と中間支援組織の育成という2つの枠組みをやらうとしており、それを3月までの限られた時間の中でどれぐらい精度を高めた設計ができるのだろうかということは引っかけた。中間支援組織を入れるのだということだけだと、他の委員が懸念しているような問題が起きたり、さほど芸術文化に関心がない企業が入ってくる可能性もある。2つの枠組みでやらうとしているところをどうやって整えたらいいか。
- 心配なのは、参加する中間支援組織が、形としては公共性を保っているように見えるが、実は特定の人だけを応援するような組織になりはしないかということ。例えば、どこどこ美術館の友の会というふうに、この人を、あるいは、このグループを支援しますというものを掲げてしまっているものはちょっと違うという感じがする。または、そういうことを掲げないで活動しているが、結果的には特定の人だけを応援しているという組織は該当するのか。
- （事務局）中間支援組織を育てることとアーティストへの緊急支援が両立するのだろうかという御意見については尤もと思うところ。ただ、事務局としては、中間支援組織となるところを育て、また、アーティストに対し、緊急支援として活

動の継続をしてもらえるような支援をしていく、幅広くしていきたいと考えている。最初は、委員の皆様が中間支援組織としてイメージされているようなところに中心的に役割を担っていただき、アーティストへの具体的な支援をしていただきつつ、それと同時に、新しいところも応募してきてほしいと思っている。また、1団体だけが中間支援組織として選ばれるわけではないので、ほかの経験がまだ浅いようなところが選ばれることも十分にあり得ると思う。どうなったら中間支援組織が育ったと言えるのだろうかという御意見についてもそのとおりだと思う。例えば、成果指標のようなものを定め、何年かやっていく中で、この事業に手を挙げる中間支援組織の数が増えてきたということや中間支援組織によって支援されたアーティストの人数がどれだけ増えたかといったことも考えられる。そういった指標などを使いながら、中間支援組織の現状を把握できるようにしなければならないと思った。事務局としては、来年度から事業を始めて、アクションプラン事業につなげていきたいという思いがある。そこに乗っかってくると、4年間など、ある程度の期間が約束され、1年で終わることなく、2年、3年と続けていける。そして、アクションプランに一度乗ると、その次の計画時にもこの事業はよかったから継続したいと言ったときに、もしかしたらさらに4年後まで続けていける可能性がある。それも含め、お金がなくなって、事業は終わりだとなってしまわないようにしたいと思う。さらに、市が何らかの関わりを持ち、事業に選ばれなくなった場合、あるいは、事業終了後も、団体が活動していけるようバックアップできる仕組みも、さらに先の段階では考えなければならないと思ったところ。

- （委員長）中間支援組織においては、まず、アーティストや芸術団体が創造活動をするに当たり、どういう支援メニューであれば、もっときめ細かな支援ができるのかということを考えていくことになる。他都市の事例を見ると、明らかに行政側の限界があり、それをどうやって越えていけるかということがある。果たして、これが緊急事態に即しているかどうかというのは仰るとおりだが、緊急事態だからこそ、パラダイムを転換するきっかけがつかれるのではないかと思うし、このときに変えていかないと、今後もこういうパラダイムは変わらないのだろうとも思っている。そして、アーティスト支援を行政だけに任せていいのかということはずっと議論されてきた。企業が参入することによる懸念もあり、中間支援組織をどう決定するのかはとても重要だが、行政側とアーティストは遠いところもあるので、どうやって橋渡しをしていけるかということも重要。今、札幌にどれくらい中間支援組織があるのかという懸念はある。また、完成した形でスタートはできないが、例えば、来年度はお試しで幾つかの団体に受けてもらい、様々

な問題が出てきたら、次年度はそれを解決していくという仕組みでもいいのではないかと思う。引き続き、委員の皆様からご意見を伺いたい。

○ここでいう中間支援組織というのは公共性が高いところでないと駄目なのか。アーツカウンシル的なところは公共性があると思うが、例えば、代理店などの民間企業、放送局やとても利益を出している大企業など、財団やNPOなどではなく、そういうところも入っていいのか？

⇒（事務局）文化庁の関係で同じように中間支援組織を募集しているようなものがあるが、そういうところでは株式会社が参入している例もあることから、決め方であり、これからの議論次第なのかと思う。また、営利企業は駄目とすると、もしかしたら難しい部分もあるかもしれないが、現段階で明確な答えを持っているわけではない。

○育てるということについて、この枠組みの中で育てる必要があるということではない。今、札幌に中間支援組織はそんなに多くないかもしれない、手を挙げてもらえないかもしれないが、そういう間口があることで結果的に思い切ってやってみようという人が入ってきて、それが育てることにつながるのではないかと思った。ただ、この仕組みはプロジェクトありきだと思う。どういう目標を持って、誰を対象に何をするか。それで、いい案はどんどん吸い上げるということだと思うので、若手の人が入ったりするといいなというようなことは、このプロジェクト、スキームにとっては関係ないと思う。ただ、A、B、Cみたいな枠をつくったとき、Aは緊急性のあるプロジェクトを優先し、予算も500万円なり1,000万円などの大きな金額とする。その一方で、BやCの枠では、未来を支える何かにサポートする。それは30万円などで新規の人たちが入りやすくするなど、その辺は何とでもなると思う。また、まだ人材が少ないということもあり、外の団体も参入できていいのではないかということもあると思う。札幌に事務局を置くというようなことはあると思うが、営利企業でも、営利的な施策でも、それがみんなのためになるのであれば、それこそ持続可能なものにするには利益だって絶対に大事なので、その礎となるための施策であればもっと間口を広げてもいいと感じた。

○結局、緊急支援で必要なことも、緊急支援が何かを考えることでよりよい支援ができるのではないか。どこが手を挙げるかではなく、まず、緊急支援として実際に実施できるようなテーマを考えるというのが1点目。それと同時に、中間支援組織もこれから増えていけばいいということで、テーマをある程度分けて、少額でもいいからそういうことを推進していくということ。この後に考えるべきは緊急支援的に必要なテーマ設定で、まずそれが先決かと思う。それを中心に考え



つつ、はみ出たところに、中間支援組織を育成も含めたような話ができたらいいという気がする。多分、緊急支援としては創作支援がまず一つにあると思う。それと同時に、キャリア支援が緊急に当たるのかが分からなかった。この後、お題目を軸にして議論するのか、まずは意見を出し合っ、緊急支援に当たりそうなものをテーマとして設定するのか。先にカテゴリーから考えてしまうと、そちらへ流されてしまう気がする。もしカテゴリーから考えるのであれば、委員長が整理してくれた創作支援、キャリア支援、アーティストバンクという三つがあると思う。

- カテゴリーというか、この資料に書かれてあることを全部実現してくれたら、アーティストとしてはうれしいと思う。これまでにあがった心配事を一つずつぶった切っていただければ、プロジェクトの信頼度が増す。また、これまでに挙がっていない支援の方法として、去年のコロナの対策で文化庁から支援金もらった人は、国立新美術館でモデルナのワクチンの職域接種ができるというものがある。要は、芸術家を守るため、助成金をもらった人は芸術家だと認定がされ、その人たちの活動を止めないためにワクチンを早めに打たせますということ。そういう支援はすごく有効だと思うし、これはまさに緊急支援の一番大事なところ。これが札幌市やほかの政令指定都市で受けられるとなおいいとは思ったが、そういうことも緊急支援の一つだと思う。
- 中間支援組織の規模感について確認したい。資料の他都市の中間支援組織の事例は、一つの都市で助成金全てを担って分配していくような大きい規模感のものと感じた。自分はまだ小さいものを思っていて、ギャップを感じたので、その辺をすり合わせていく必要があると思う。
- 自分も確認しようかと思っていた。アーツカウンシルのものは組織としても財源としても巨大。今、札幌市では、中間支援組織をもともとやっていた団体なんてほとんどない。やったことのない団体でも担える可能性があることを期待し、今後、中間支援を担ってもらうことになるのだと思う。だから、どちらかという小粒の中間支援組織がたくさんいるという状態が新しい札幌バージョンの芸術文化に対する中間支援の在り方というか、目指しているところのように思う。前回の会議で、アーツカウンシルが札幌にはなく、それを担う可能性がありそうなSCARTSも今のところは機能していない、では、どうするかということがあった。これだけいろいろな活動をしている人たちがいるのだから、その中から中間支援を担えるところがいっぱい出てくるといいというところでのスキームが出来上がったということだと思う。前例がないことをやろうとしているということが大前提に話をしていた方がいいと思う。つまり、我々はアーツカウンシル

をつくるためにやっているわけではなく、新しい中間支援の形について、札幌バージョンで、すごく細かい集合体みたいなものをつくらうとしているということ。そこがずれていると、この後の議論がちぐはぐになるような気がする。

⇒（委員長）仰るとおり、札幌方式というのは、アーツカウンシルをつくるためではなく、小さい中間支援組織が自由に支援メニューをどんどん考えながらアーティストに寄り添ったメニューを生み出していくものをイメージしている。巨大なアーツカウンシルをつくらうということではなく、札幌方式ということ。また、もう一つの大事なポイントとして、アーツカウンシル東京などは設置者が自治体だが、今回は、恐らく、中間支援組織は民間が担っていくのではないかと思う。民間でも公共を担っていくという意味でも非常に画期的なものになると思う。

### 3 支援テーマ及び支援メニューについて

#### (1) 議論の方法

J a m b o a r d（オンラインにおけるコミュニケーションをスムーズにするための電子ホワイトボードツール）を使用して、支援テーマや想定される支援メニューについて話し合いを行った。

#### (2) 各委員からの意見

○（副委員長）支援テーマとなるカテゴリーを最終的に全体で共有しなければいけないが、それには中間支援組織が提案してくるであろう支援メニューを具体的に想定しながら、緊急性のあるもの、中長期的ものと考えなければいけないと思う。今回は、J a m b o a r dを使用し、支援メニューの具体的なイメージをダイレクトにJ a m b o a r d書き込み、ワークショップ的な方法で進めていきたい。

〔各委員によるJ a m b o a r dへの書き込み〕

○たまに50代の新人がいる。始めたのが20代ではなく、子どもが成人してから始めたというアーティストだが、年齢制限があるから新人として扱って欲しくない。だから、年齢制限がない新人キャリア支援みたいなものを考えた。

○創作支援という大きなテーマとアーティストキャリア支援のほか、アーティストバンクがある。「バンク」という言葉が少し下のレベルの言葉にも聞こえるので、もう少し大きなくりにできないか。

○海外ではアーティストファイルという言い方をする。

○根本的なところで言うと、価値づけや発信みたいなもの。発信のもっと上段に行く価値づけ作業みたいなことになる気がしなくもない。

○アーティストファイルは、例えば、アンケートをお願いするという連絡が一気に

行ったりというもの。また、ドイツでは、緊急支援をするとき、アーティストファイルの人は無条件に審査要らずで、いきなりぼんとお金を受け取れるということがあった。

- 主に創作支援につながるもののイメージでいくつか書いた。何個か紹介すると、一つはアウトリーチの話。一つの緊急対応としてアウトリーチを醸成することはなかなか難しいだろうが、ある種、新しい活動の場面をつくるということ。今まで活動していた場所ではやりにくい事業が出てきたとき、学校に対してアプローチしていくというのは、一つの新しい活動のフィールドを広げるという意味では緊急支援になり得るというイメージ。最近、近場で若いアーティストたちが自分たちの創作スペースをつくりたいという話が出ていたので、そういう場所をつくるということもあり得ると思う。また、自分一人ではできないことはたくさんあり、例えば、ドキュメントをつくる、あるいは、特殊な機材を使うなど、テクニカルなことや記録のようなところに支援があってもいい。これは、コロナだから緊急にということではないかもしれないが、将来的なことも含めてということ。また、コロナ対応について、いろいろな心配を拭うために、コロナに配慮した活動になっているかを専門家に判断してもらったり、アドバイスをもらったりする支援が緊急のものとしてあったらいいと思った。また、制作のプレイヤーのアーティストの方だけではなく、それをサポートする人たちで、制作補助やサポートをする人たちの人件費が支援できるといいと思う。
- アーティストが自分のことをマネジメントするのはつきもの。企業であれば研修などを会社からたくさん提供しているが、フリーランスの人の自分の研修の機会は、セルフスタディーで大変だと思う。ビジネスの部分を支えてあげる支援があるといいと思う。
- 企業でなくてもいいのだが、技術的なマッチングや紹介みたいなことができたらいいいと思った。民間とアーティストの距離は遠い気がする。本当はこういう要望があるが、声かけの仕方が分からないということがあったときに何かできたらいいいと思った。
- 他の委員が書いている作品制作の支援もいいと思った。学校派遣やスペース開設でもいいが、その下にさらに札幌のこの地域でやりたい、この山で、この川でやりたいなどが出てくると思う。札幌が面白くなるということで行くと、ロケーションありきみたいなものに焦点が当たるようなものがあつたらいいと思う。山や自然空間、あるいは、町内の人たちや地域住民と協働するメニューが並んでいたら面白いと思った。
- 弁護士相談について記載した。何かを使うときの著作権の問題など。また、若手

からよく聞くと、契約書の記載に関する事など、そういう相談が無料でできるといいと思った。

- プロモーション、発信力高度化（ウェブ）、英文翻訳などのサポートといった間接的なことを書いた。キャリアを支援するということの中で、新人であっても中堅の人でも、技術を外に出してくという流れをどうつくっていくかも支援の続きとして大事だと思っている。そこで、そういうことをサポートしてくれるような相談。例えば、英文翻訳は割と難しく、どうしたらいいのかという悩みがあったりする。プロモーションについて、例えば、放送局とつながることによって、自立した後のポピュラリティーを得るために、サポートメニューの延長で民間に入っていくながら知名度が広がっていくような、発信力があるところが何かを受け持つ手もあると思った。
- スタートアップ支援に近いと思うが、芸術系や文化系の部活に参加されている方や、学校に部活はないけれども、そういうことに興味のある中学生や高校生、大学でのサークル活動をしている方も含め、学校にいる間に、札幌の学校の界隈ではないところで、アーティストの方との交流や、学校を卒業した後もそういった文化活動を続けていけるような仕組みがあると育つ環境としてはいいと思う。人によるが、学校を卒業後に活動する場所がなくて活動をやめてしまうというという声もたくさん耳にするので、そこを支えていけたらいいと思った。
- パトロンになってくれる企業を探す、あるいは、お金はあるが、どこに使っていいかが分からない人がいるのであれば、そういうところとつなげるという支援を書いた。特定の企業が特定の分野や特定の団体を応援するというのはよくある話だが、もう少し満遍なく応援してほしいという団体なりアーティストがいたときにうまく見つけてくれるというものがあるといいと思っていた。
- アーティストバンクを支援テーマとして考えるのであれば、これは中間支援組織がやるようなことなのか、行政が継続してやっていくようなことをそもそも考えたほうがいいのかもしれないという気がしている。行政との連絡網というか、バンク自体が持っている機能としてはそういうことなので、種類で言うと支援メニューなのかなという気がした。とはいえ、情報発信や交流機会など、ほかの委員が書いていることも含めて考えると、高付加価値化みたいなことかなとも思う。アーティストが閉じてしまわないように、外とのつながりをつくるような仕組みづくりがもしかしたら支援テーマになるのかもしれないということで、ここは保留にしておいたほうがいいような気がする。
- ある意味、アーティストバンクはコンテンツ。だから、結局は、どう運用するかという話になってしまう。そのため、こういう場で仕組みをつくって、それを運

用してくれる人を探すほうが手っ取り早くていいという気はする。今回の支援策としていろいろな支援メニューを考えてもらうみたいなカテゴリーからは外してもいいかもしれない。また、これは長期的に運用されていないと意味がないこと。そのため、短期で考える話ではないという気がする。

○今日の議論では、アーティストを直接的に支援したいという話と中間支援の話が主にあった。とはいえ、そもそもコロナ禍の芸術創作活動を守ろうということが大前提だとすると、あくまで、研究支援という軸は、そこに中間支援がたとえなかったとしても、まずやったらいいのではないかと考えている。中間支援組織がどうあるべきかと言っている間に、コロナのフェーズが変わっていくので、まずやろうというのが自分の考え。そのため、緊急支援という支援テーマを書いた。

○そもそも今は短期の緊急支援について話し合っており、緊急支援という支援テーマを作ってしまうと、他の支援テーマは緊急支援ではないのかということになってしまわないか。

⇒短期の緊急支援の中でも、さらに短期のものと、中長期のものというか、札幌市として中長期的にやっていくべきというものに分かれていくだろうなと感じた。本当に短期のものは、札幌市の補正予算か、次年度の予算か、いつを目指したものかを全体でもう一度共有する必要があると思う。

○まずは来年度予算でできることを今は考えており、これが短期で緊急に必要なことで、中長期のものというのは、いわゆるアクションプランに何を入れるかということという認識だった。だから、今ボードに書かれている支援メニューは、これから中間支援組織として名乗りを上げる人たちが挙げてくるであろう想定のもので、その中で緊急性が高く、内容として効果的と思うものを何かしらの基準で判断し、実際にやってもらおうとしているものだと考えていた。

⇒（事務局）今仰っていただいたとおり。今回挙げていただいたものは、来年度から事業を開始できるもので、こういったもののうち緊急的に必要なものをしていきたいと思っている。次年度事業の構築ということで、いろいろなことをやっていきたい。あわせて、アクションプランで、この中に入っている中長期でやっていくべきことをダブルでやっていくというイメージを持っている。

○つまり、緊急支援を来年度から来年度予算でやるが、それは令和5年度以降も継続される可能性があり、そして、それと並行してアクションプランを考えていくということか？

⇒（事務局）御認識のとおり。

○今ここで想定しているものがもしかしたら2年か3年続く可能性もあるが、今後

のワクチンの普及やコロナの動向が分からないので、今はコロナ禍が続くことを想定して緊急支援をしていこうという考え方は一致しなければいけないと思う。その考えが前提にあり、アーティストバンクは今すぐ緊急につくる必要があるのだろうかということで、外してもいいのではないかという話を先ほどしたところ。そうすると、創作支援とアーティストキャリア支援の二つが残るが、この二つで今挙がっている支援メニューのようなことがぱっと挙がってくるのであればいいが、創作支援とアーティストキャリア支援だけではカバーできないかもしれない。緊急支援という支援テーマは全部にかかってくることなので、新しく三つ目として、例えば、ここで言うとその他みたくなってしまうが、新しい支援テーマのカテゴリーで作るか、この二つをもう少し広げることをイメージしていた。

- 緊急支援という支援テーマの内容は、創作支援とアーティストキャリア支援にはめ定めるものもあると思う。今は仮でいくつかの支援テーマ分けているが、そこには入らない支援メニュー、要は先ほど話にあった、その他のような新しい支援テーマになるもので、この政策を考える上では支援テーマをどう出していくか、お題をどう出していくかが大事だと思う。例えば、今書いた支援メニューをくっつけて一つのカテゴリーをつくったら、中間支援組織が提案しやすいかもしれないという状態をつくってあげるのが理想的ではないか。
- 難しいのは、メニューを提案してきた人たちにとっては緊急性があるということもあるということ。キーワードだけで見るとそうでもないが、今これをやらないと彼らは救われたいみたいなことがあるかもしれない。だから、一概に言えないというのは想定しておかなければいけないと思う。
- コロナ、あるいは、アーティスト同士の交流や情報交換で創作環境整備みたいな言葉にできないか。直接結びつくものではないが、仕事がしやすくなるというイメージ。例えば、それが支援テーマの三つ目であったら、そこは差別化できるのかなという気がした。
- 作品のプロセスとできた後の発表という意味で、創作と発表を分けるのはどうか。
- 今、創作支援という支援テーマがあるが、発表に関するものも入っており、例えば、4つ目の支援テーマで発表支援を作ると、創作支援が分割される。
- コンペや海外派遣は40歳以下というものが多い。40歳以上で、作品制作もそれなりに充実しており、規模の大きな展示に呼ばれるような作家がいまいち支援されていないという声が全国的にある。
- 若手への支援は多いが、中堅への支援はあまりないということか。
- 札幌市内でもそういう声はある。例えば、中長期的に、1年とか2年、若手支援よりも予算を上げて長期的に支援するというようなことはどうか。最終的な成果

は、大規模な展覧会をする、カタログをつくるなど、何百万円単位で人数の少ない中堅の作家をキャリア支援するというようなイメージ。

- 中堅アーティスト支援は、やはり、コロナで収入が減るのがすごく大きいから緊急性が結構高いのかと思った。
- 中堅アーティスト支援について、ここが辞めどきではあるので、そういう意味では緊急性は比較的高いのかもという気がしている。もちろん、長期的な意味も踏まえて。
- 若手のうちはキャリアができていないから支援をして、キャリアが出来上がった中堅は支援する必要がないだろうという考え方が今の全国的な状況だと思う。
- 例えば、コロナで展覧会が中止になったとき、中堅と若手のどちらに大きな損害があるかといったら、かかるお金も大きいし、どう考えても中堅となる。
- それに中堅キャリアの恒常的なサポートがないというのも事実。支援の狙いをはっきりさせると分かりやすくなると思う。
- （委員長）創作環境整備はとても大事かと思うし、アトリエ支援など、いろいろなことがもっと出てきそうな気がする。また、今出てきている創作と成果発表会を分けることもあると思う。今出てきている創作支援、アーティストキャリア支援、創作環境整備支援、発表支援の四つをそのまま支援テーマとするか、あるいは、創作と成果を一緒にするかなど、いろいろな検討が必要だと思う。今日の議論の内容を札幌市文化部でも検討してもらえたらと思う。
- （事務局）支援テーマとなるものをどうするかを決めないと次に進めないので、創作支援なり、アーティストキャリア支援なり、創作環境整備支援なり、発表支援なり、それらを受けて整理していかなければならないと考えていたところ。
- （委員長）それでは、これを札幌市文化部に渡すか、あるいは、1週間くらいスラックにアップするのではどうか。時間が経つと、こういうものもあるのではないか、こういう切り口もあるのではないかという案が出てくると思う。いかがか？
- ⇒（事務局）文化部としては、1週間ぐらいで皆様から追加でご意見をいただくと、その後、やりやすくなると思う。
- （委員長）それでは、1週間ぐらいスラックにアップさせていただく。少し広い概念でテーマがつけられていくといいと思う。もちろん、今のままでも結構だが、もし追加することがあればお願いしたい。ほかに質問等はあるか。
- 中間支援組織に対する質問がいっぱい出たと思う。それに対し、暫定的でもいいので、回答を次の会議には文化部側からいただきたい。
- ⇒（事務局）中間支援組織への支援など、初めてに近いことを札幌市でトライしようとしており、今の段階で完璧な答えはきっとできないと思う。ただ、我々とし

てこうなのではないかなと思っているようなことになるかもしれないが、いただいたご質問に対してお答えをさせていただきたい。

- 中間支援組織は、一番お金になりにくい。例えば、主催者は一銭も取ってはいけないみたいなことを平気で言われたりもするので、その辺は改善していただけたらと思う。何でこんなに中間支援組織の数が少ないかというと、お金にならないからで、誰もやりたがらないから。そういう能力がある人は別の商売やったほうがましだとなってしまうと、やはり、そこを変えていかないと駄目だと感じている。
  - 賛同する。中間支援を担う人たちがそれを担う対価を得ることは必要なことだと思う。その割合をどのぐらいするかという問題はあるが、そこはきちんと考えておいてあげなければいけない。また、中間支援の在り方について、一定の概念を提示するのではなく、札幌として進めようとしている中間支援組織とはこういう考え方であるなど、この議論でオリジナリティーのあるものにできたらいいのではないかと思った。
  - （委員長）中間支援組織に対して、今後、我々が実際に実現化するに当たって、未来会議でいろいろな事例を一緒に勉強できればいいと思う。国内には様々な事例があり、そこを実際に運営している担当者とオンラインでつないで、どのように支援メニューをつくっているのか、何が大変なのかなど、生の声が聞けるといいなと思う。委員の皆様には勉強したいと思う団体を募集させていただく。事務局として、そうした勉強会はいかがか？
- ⇒（事務局）いいと思う。先進的な事例を参考にしながら我々も大いにやっていくべきだと思うので、そういう機会をつくれたらいい。